

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	理性的な分析と身体的なトレーニングとそれらの教育的含意 SPAC 俳優による演劇ワークショップをとおして				
研究組織	代 表 者	所属・職名	言語コミュニケーション 研究センター・特任講師	氏名	小田 透
	研究協力者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	言語コミュニケーション 研究センター・特任講師	氏名	小田 透

講演題目
共同作業の前提となる関係作り——SPAC の舞台音楽家によるワークショップからの知見
研究の目的、成果及び今後の展望
研究の目的：単なる内容伝達ではない、感情をともなったコミュニケーションのためには、狭義の語学力だけでは不十分であり、発声技術や身体技法のような表現力が必要だが、それこそ本学の学生に欠けているものでもある。本研究は、外国語学習に応用できるような声と体の運用法の構築を念頭に置きつつ、そのための基礎となる母国語の言語感覚や身体感覚を研ぎ澄ます訓練方法の案出を目的とし、SPAC（静岡県舞台芸術センター）の協力のもと、演劇訓練の手法を取り入れたワークショップの開催を目指した。 研究の成果：SPAC で舞台音楽家として活躍する棚川寛子氏を講師として招聘し、学生、教職員、一般市民を対象とした対面のワークショップ「日常生活のための演劇ワークショップ——リズムと遊ぶ、音楽を作る」を、2 月上旬に 3 回開催した。ワークショップの参加人数は延べ 39 名（実人数 34）で、その年齢層は 10 代から 70 代まで幅広かった。アンケート結果（回答数 34、回答率 87%）によれば、全員がイベントに満足しており、約 7 割（回答数 24）がリズムや言葉にたいする意識に何らかの変化を感じていた。 平日の夜（18 時 30 分 - 20 時 30 分）と祝日午後（14 時 - 18 時 15 分）の静岡芸術劇場でのワークショップは、リズム感の養成と共同創作を主題としつつ、共同作業にはコミュニケーションが必要であること——講師の棚川氏の言葉を借りれば「何をやるか以上に、誰とやるかが重要」であり、そのためには互いを知るための時間やウォーミングアップ的な活動が絶対に必要であること——を前提とする 2 種類のワークショップを行った。参加者は、ペアワークやグループワークをとおして、言葉で相手に意思を伝えることの難しさを体感するとともに、リズムの模倣・反復やリズムと身体所作の連動をつうじて、または、即興的な合奏をつうじて、非言語的な水準で意思が伝わることにあらためて気づくことができた。 今後の展望：「圧倒的にインプットが多い」日常生活にはないアウトプットの機会であり、「初対面の方と短い時間ながら一つのものを目指し共有する」貴重な体験であったというコメントをいただいた。また、リズム感のトレーニングを教室に持ち込むには、教える側と学ぶ側の関係作りや意思疎通を意識的に行なう必要があることも、今回の試みから見えてきた。今後も類似のイベントの開催を目指し、日常を豊かにする機会を広く社会に提供するとともに、そこで得られた知見を英語教育に生かしていきたい。